

近世堂上歌会短冊集成

さ さ き た か ひ ろ
佐々木孝浩

(附属研究所斯道文庫長)



- 左から順に、
- ① 水無瀬氏成
白小短冊
 - ② 三条西実条短冊
 - ③ 西園寺実益
短冊裏
 - ④ 櫛笥隆致短冊
 - ⑤ 飛鳥井雅庸短冊
 - ⑥ 水無瀬兼俊短冊
 - ⑦ 圭瑞詩短冊
 - ⑧ 一字名「西」
(未詳者)
白小短冊
 - ⑨ 三条西実教短冊

俳人が手にする句を書きつけるための細い紙。それが「短冊(たんざく)」である。平安末頃から使われるようになった和歌の用紙が、漢詩や連歌・俳句などでも利用されたのである。和歌短冊としては鎌倉後期頃のものが見られる。

宮中などでの公式な歌会の提出用紙は、懐紙(かいし)と呼ばれる厚手の紙が用いられた。時代や身分での差もあるが、約36×50cm程度の懐紙を、縦に8分割したものが短冊である。

江戸時代では、天皇や上皇・法皇の主催する御会(ぎょかい・ごかい)の内、その年最初の会である御会始や、7月7日の七夕と9月9日の重陽など、年中行事的な会では懐紙が用いられた。これに対し、頻繁に催される通常の御会や、堂上(とうしょう・どうじょう)と称された公卿・殿上人らの私的な会では短冊が用いられた。短冊は懐紙の簡略版であったのである。

懐紙と同じ紙質であった短冊は、誰が定めたのか、室町時代が始まる14世紀末頃より、上下端に藍と紫の紙を薄く漉き重ねた雲紙(くもがみ)が、公式な短冊の料紙となった。これにより従来の紙のものは

白短冊(しろたんざく)と称されるようになり、雲紙より格下に位置付けられたのである。

短冊には懐紙にはない独特な用法もあった。指導者の歌人が必要な数の歌題を定め、それを一つづつ三折した短冊の上部に書いたものを、題が見えないように折り畳み、歌会の参加者にくじ引きのように取らせ、当たった題でその場で詠んだ歌を、題字の下に書かせるという、遊戯性の強い形式の歌会があった。これが探題(さぐりだい・たんだい)である。この会の短冊は、当然のことながら、出題者のものを除いて、題と歌の筆跡が異なっているのである。

通常の歌会でも探題でも、参加歌人達から提出された短冊は、身分や歌題の順に重ねて、上部に穴を空け水引で縛り、やはり指導的立場の歌人が、最末の1枚の裏に、開催日や会の形式などを書き加えて、保管されるのが慣例であった。歌会の記録というものは、それをまとめて書写したものなのである。

歌会の短冊は、詠者の自筆であることや、一首でも詠まれた内容を鑑賞できることなどから珍重され、江戸時代にはその収集も始まった。水引が切られて、散り散りになったために、単独では詠作事情

が判然としない短冊は数多いのである。

前置きが長くなったが、ここで紹介したいのが、「近世堂上歌会短冊集成」である。近世初期の9回（一例詩歌会）と江戸後期の10数回分の、公家の歌会での短冊218枚からなるコレクションである。水引こそ切られているものの、歌会時のままの姿を留めている。古い9回は裏書も揃っており、時期や会の形式が次のように特定できるのである。

- ① 文禄5 (1595) 年 5 月 8 日水無瀬氏成家当座歌会
- ② 慶長17 (1612) 年 4 月 11 日宗恵家当座月次歌会
- ③ 同 5 月 19 日西園寺実益家当座月次歌会
- ④ 同 7 月 30 日徳大寺実久家当座月次歌会
- ⑤ 同 8 月 15 日西園寺実益家歌会
- ⑥ 同 9 月 19 日水無瀬兼俊家当座月次歌会
- ⑦ 元和 7 (1621) 年 3 月 3 日三条西実条家詩歌会
- ⑧ 同 8 (1622) 年 8 月 15 日勝盛家当座歌会
- ⑨ 寛永13 (1636) 年 8 月 21 日広橋賢兼家当座月次歌会

枚数は順に10・15・15・20・15・13・2・15・20枚である。①⑧は珍しい小さな白短冊で、大きさは27.9×4.3と31.2×4.5cmである。一般的な雲紙を用いた②の36×5.6cmと比べても、その小ささが判るであろう。また⑤は37.7×5.5cmとやや大きく、紙質も他の同年中の会とは異なる厚手のものであり、会の性格に違いがあるものと考えられる。

そのことは、穴や折目の様子でも確認できる。⑤は、穴はあるものの、折目のあるものとなないものが確認できる。探題ではない場合も、文字配置の目印とする為に三折にすることはあるのである。題字と歌の筆跡が全て共通することからも、⑤が探題歌会ではなかったものと判断できる。

⑦の詩短冊の題は「三月三日」だが、三条西実条（さんじょうにしさねえだ）の和歌短冊には題字がない。歌は桃の節句を詠んでいるので、題を自明のものとして省略したと考えられよう。上部の穴はあるので、最初から2枚のみであったとは思えない。

⑤⑦以外のものは、穴と折目がある。それらの5回は、その場で出題される当座形式で行われており、①⑧を除いて、毎月開催された月次（つきなみ）会でもある。またこの5回は各会で題字の筆跡が共通しているので、探題歌会であったことも判るのである。題字の筆者を明確にするのは難しいが、

①③④⑥⑧⑨は三条西実条で、②は飛鳥井雅庸（あすかいまさつね）の筆であろう。共に中世以来の歌道家の人物である。ちなみに③は1枚目の実条短冊に折目がないが、これは実条が出題者であったことと関係するのであろう。

出題は会の目的や形式、参加人数などに併せて構成されるものである。開催時の季節と恋・雑が組み合わされているのが①④、四季恋雑のセットが②③⑨である。⑤⑧は仲秋の会なので、題も四季恋雑と月を絡めたものとなっている。⑥はやや特殊な一文字のみの題である。和歌は与えられた題を巧みに詠みこなすことが要求されるが、探題は即興であるだけに、歌人の力量がはつきり出やすいのである。逆に良い歌は題によって引き出されもするので、出題者も心しなければならぬのである。

天皇や上皇が主催する御会は、公的な催しであり、注目度も高く、それを記録した資料も数多い。しかし私的な催しは、日記やそれを引用した歌集類によって断片的な情報を拾える場合がほとんどで、その原資料がまとまって伝わることは稀である。このコレクションは、近世初期頃の公家達の私的な和歌活動の実態を、生々しく伝える貴重な存在なのである。

紙幅の関係から言及できなかった、文化・文政期頃の一群の歌会を含めて、このコレクション全体を見渡して気付くのは、全ての会で参加者が確認できる家は一つのみという事実である。それは、室町期を代表する歌人学者として名高い実隆（さねたか）以来の歌道家の三条西家である。近世初期の9回の多くで実条が出題者であったこと、江戸後期の会では実勲（さねいそ）、季知（すえとも）の名が目立つことなどからすると、このコレクションは三条西家旧蔵である可能性が高そうである。古典学の家として、数多くの貴重な写本を所蔵していた同家の旧蔵本は、学習院大学、早稲田大学、日本大学、京都女子大学などを中心に処々に分蔵されている。書物ではないけれども、その周縁の存在として、同家旧蔵資料を考える上でも、この短冊の一括は注目できる存在であると言えよう。今後の多方面からの総合的な精査を期待したい。

[請求記号 133X@159@1]